

第百七話 日本における従軍宗教者

従軍看護婦からの連想で、従軍僧（宗教者）は居ないのだろうかとなり、調べてみた。制度的なものは従軍神職制度（939(S14)年制定）があるのみである。

古来より、戦いは命のやり取りであり、戦争に従事する者の魂の救済は必要不可欠であり、また死者の供養も重要であった。欧米諸国では、旧約聖書の時代から戦いに司祭・牧師等が参加しており、現在はこの聖職者を一般にチャプレンという（厳密には military chaplain）と呼んでいる。日本では、陣僧と呼ばれる僧が存在し、室町時代、軍陣に同道して、戦死者の供養をはじめ文書作成や敵方への使者を務めた。戦国時代にも一流の知識人であった高僧が参謀的役割を担い、使僧として行動した。

1 欧米諸国

遅くとも4世紀のローマ帝国軍には既に存在していたとされる。公式には、742年にレーゲンスブルクの会議で聖ボニファティウスが従軍牧師の職務を軍務として認めたことに始まる。従軍牧師は軍人ではあるが衛生要員と同じく中立として扱われ、このことは1864年のジュネーブ条約第2条でも規定され、保護される。一般的には士官相当

2 日本（～1939(S14)頃迄）

日本軍においては、従軍僧（仏教）が存在したとされるが、軍人ではなく軍属扱いであった。浄土真宗各教団においては軍隊布教使と呼ぶ布教使を派遣している場合もあった。また、日本軍では聖職者でも一般人と変わらず徴兵の対象とされたので、神職や僧侶の資格を持つ軍人が、臨時に従軍神主や従軍僧のような役割を行う場合があった。

- (1) 従軍布教活動（各宗派の従軍僧派遣目的は布教活動だったのか？）
- (2) 日蓮宗の日清・日露戦争における物資の補給、戦死者の供養、病院慰問等
- (3) 浄土真宗、臨済宗（日清戦争 非戦と平和の宣言文に関する総長談話）
- (4) 真言宗派遣従軍僧（日清戦争）
- (5) 浄土真宗

日露戦争においては、日清戦争を遥に越える規模の従軍僧を派遣した。従軍僧は、宣戦詔勅や法主のことは基準にして法話・説教を行い、“この戦争が仏教の殺生戒とは矛盾しないこと、平和のための戦いであること、慈悲の精神から捕虜や非戦闘員を助けるべきこと、そして恐怖心が湧いた時は南無阿弥陀仏を唱えよ、国家のために死ぬのは名誉であり、靖国神社に祀られるのは身に余る幸せである”等と説いた。

(6) 念仏師団

真宗門徒の多い石川・富山・福井の3県の連隊から構成される第9師団は、有名な旅順総攻撃で一斉に「南無阿弥陀仏」と唱えながら呐喊したと伝えられている。

3 従軍神職制度の創設

1939(S14)年8月、陸軍省は「従軍神職制度」を定め、その定員は師団に3名、兵站監に2名、独立旅団に1名とした。従軍神職は、これまで応召中の軍人神職や慰霊使によって執行されてきた戦闘後の慰霊祭等に奉仕することであった。広東、南京、済南、北京等の各地で、戦没者の為の大規模な慰霊祭が営まれた。

4 近代国家以降について云えば、日本と欧米諸国では、従軍に関する考え方に大きな差異があるような気がする。日本は死者を弔うことに力点があり、欧米では生前の心の平安を重視していたような気がする。

日本軍における魂の救済 戦死した際には英霊として靖国神社に祀られるということが、戦争参加将兵の魂の平安に繋がっていたのだろう。英霊となって、永遠の命が得られるとの確信があったのだろう。或いは、八百万の神信仰と何か関係があるのだろうか？使命感のみでは物足りないものを何に求めるべきなのだろうか？